

進捗状況の概要 【1ページ以内】

1. 全体状況：本構想で掲げる「人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム」（Sophia-Nanzan Latin America Program、以下LAP）及び運営体制を構築し、中南米諸国との学生交流の促進にとどまらず、自らの専門に立脚しつつ、高まる多様性、顕在化する地球規模の課題を認識し、その解決に貢献できる人材の育成に繋がる国際高等教育連携交流モデルの確立への着実な一歩を進めることができた。

2. プログラム運営体制の構築：プログラム運営にかかる重要事項を決定する機関として、事業責任者を委員長とする「プログラム運営協議会」を設置し、国内連携3大学の緊密な連携の下で事業を遂行している。さらに、上智大学及び南山大学はLAP専従の嘱託職員各1名を採用し、両大学の専任職員と共にLAP運営業務を実施する体制を整備した。加えて、南山大学は日本語集中コース担当特任講師1名を採用し、上智大学への橋渡しを念頭に入れた中南米学生向け教材と学修支援体制を確立した。受入学生は、南山大学で日本語学修とインターンシップを体験してから、上智大学で正規課程の学修を継続するマルチキャンパスでの留学プログラムを活用している。派遣・受入学生共通科目「日・ラ米比較演習」では、中南米と日本の学生が両地域の社会等の比較研究を行い、学生間の交流も深めている。「人の移動と共生」では、ケーススタディに重点を置いたアクティブ・ラーニングにより、中南米以外の留学生や日本人学生も参加して、多様な視点をもつ学生がともに地球規模の課題について学んでいる。加えて、LAP学生はインターンシップを通じて日本と中南米の企業・団体で多様な経験を得ている。国内連携3大学合同の短期派遣プログラム「ペルー・スタディツアー」は、上智短大と秦野市日系人コミュニティとの繋がりを活かした事前研修と現地での研修を組み合わせ、日本と中南米間での人の移動と共生の実際に触れ、調和と人間の尊厳の追及のあり方を多面的に考える、LAPを代表するプログラムの1つとなっている。

3. 関係機関とのネットワークキング、プログラムの質保証：LAPの本格始動にあたり、事業開始年度には、中南米と日本の主要連携大学が一堂に会する「プログラム開発協議会」を実施するとともに、学外関係者も参加するキックオフシンポジウムを開催し、広く本事業への理解と協力を呼びかけ、円滑な事業運営のための連携基盤を構築した。また、高等教育の質保証や国際機関・民間企業で中南米に関わる専門家が参加する「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、外部有識者と共に事業を客観的に評価し、今後の改善と継続的発展に繋げる体制を構築した。加えて、「インターンシップ協議会」を開催し、受入協力機関の担当者とともに、実施報告を踏まえ次年度以降のプログラムのあり方を協議した。

4. 学生のモビリティ：平成27年度は1ヶ国1大学へ15名を派遣、4ヶ国4大学から4名を受け入れた。平成28年度は4カ国7大学へ37名を派遣、6カ国12大学より22名を受け入れた。その内平成27年度は4名、平成28年度は14名が南山大学と上智大学でのマルチキャンパス留学プログラムを活用した。

5. 外国人学生の受入、日本人学生派遣のための環境整備：LAP専従教職員や英語対応可能な常勤カウンセラーを含む相談体制に加え、受入学生は学生寮に居住することができ、日本人学生との交流を深めた。派遣学生には渡航前危機管理ガイダンスや、学科教員による個別の面談を通じて留学や学修計画を支援する体制を整えた。

6. 課題：派遣学生数がやや目標を下回っているため、治安面の不安や欧米留学が主流なイメージを払拭し中南米への関心を促進するための留学経験者によるPR活動などの企画を検討する。受入学生数の継続的確保については、より多くの学生に経済支援ができる体制構築を検討していく。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成27年度				平成28年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
15人	15人	4人	4人	42人	37人	19人	22人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

1. マルチキャンパス教育交流プログラムの確立

国内3大学それぞれの教育プログラムの強みを組み合わせるとともに、企業や日系人コミュニティでの学外研修を組み込んだマルチキャンパスでの教育交流プログラムを確立した。具体的には、南山大学において留学生別科での日本語教育の実績を踏まえたLAP特設プログラムとして、4週間の日本語集中コースと日系人学校や中南米で事業を展開する企業でのインターンシップを開発し、中南米からの留学生が南山大学で日本語集中コースやインターンシップに参加する。その後、上智大学へ移動して自身の専門分野を英語で学修するとともに、LAP特設科目「日・ラ米比較演習」、「人の移動と共生」等を設置し、日本と中南米または地球規模の課題を軸とした多層的な学びの機会を提供することで、多角的な視野で問題の解決に向けて協働できる人材を育てるマルチキャンパスプログラムを確立した。この他、「ペルー・スタディツアー」では、上智短大が秦野市と連携して取り組んでいる日系人コミュニティでのサービスマナー等の実績を活かして、日系人コミュニティとの交流を含む事前合宿（1泊2日）を実施している。

2. インターンシップを組み込んだ交換留学プログラムの開発

受入学生には、1回以上のインターンシップの機会を提供している。受入先は、中南米で事業を展開している企業が中心で、留学生は訪問企業の概要や中南米諸国への事業展開について学ぶとともに、その企業で働く外国人との交流を通じて、外国人の視点から日本企業で働くことについて理解を深め、生産現場における人の移動と共生について学んでいる。加えて、派遣学生についてもインターンシップの機会の提供に努めている。受入留学生向けのインターンシップには、派遣前の日本人学生も参加可能としている。また、派遣中の学生にも現地でのインターンシップの機会を提供し、メキシコに留学中の学生は現地学校法人での約5カ月のインターンシップを通じて中南米社会をより深く理解し、日本と中南米社会の架け橋となる経験を積んでいる。このようなインターンシップを含む留学プログラムは学生にも好評で、これまで受入の少なかった中南米地域からの留学生が増加している。また、派遣学生にとってもLAPによる留学の魅力の1つとなっている。

3. 国内連携大学間の学生交流によるグローバル人材の育成の促進

国内連携大学合同の学生派遣プログラムでは、参加学生間で切磋琢磨と学びあいによる好影響が現れている。例えば、上智短大は英語科単科・女子学生のための環境であるが、「ペルー・スタディツアー」に参加し、上智・南山大学からの参加学生と交流することで様々な刺激を受け、視野の広がりや進路選択、学修への好影響が見られる。平成27年度参加学生の内、上智大学へ編入学した学生は、卒業論文でも南米日系人をターゲットにしたメディアについて研究している。また、秦野での事前合宿にゲストスピーカーとして参加した日系人1名が、学生との交流を通して本学での学びの魅力を知り、平成29年4月より上智短大へ入学した。「教皇庁立ハベリアーナ大学スペイン語集中研修」でも、参加者2名がその後中南米への長期留学を決意した。これらの短期プログラムの導入により、国内3大学いずれにおいても、様々な地域への留学の機会が広がり、より多様な見地から異文化を学ぶことができるようになった。

4. 中南米諸国関係機関との連携

国内連携3大学、中南米連携13大学間での大学間連携に加えて、中南米大使館や国際機関・企業とも緊密に連携した教育プログラムを展開している。中南米諸国の大使館とは、平成28年3月に開催した「キックオフシンポジウム」等の機会を通じて本事業への理解を深めていただいた結果、積極的な協力を得られる関係が構築された。これまで短期派遣プログラムの派遣前ガイダンスにご協力いただいている他、上智大学中南米フェアにあわせ、駐日中南米大使館（コロンビア、メキシコ、ペルー、チリ）と協力して同地域への留学の魅力を伝える「太平洋同盟創立5周年記念シンポジウム」（平成28年10月）を開催し、学内外より総勢約110名の参加を得た。各国大使・大使代理によるスペイン語での講話や学生によるLAPプログラム体験談はシンポジウム参加学生にも好評で、LAPについて広く認知してもらうことができた。また、南山大学では、駐日コロンビア共和国特命全権大使による公開講演会（平成29年2月）を開催した。その他、上智大学が包括連携協定を締結している米州開発銀行（IDB）や国際協力機構（JICA）からは、本事業の国際協働教育評価協力者会議に委員を派遣いただいている。IDBとは今後インターンシップ等においても連携を進める予定である。